

生涯教育的観点からの看護における タッチに関する考察

大学院 博士後期課程 山崎 裕美子

はじめに

看護は、手を用いて看護の対象である人に直接的なケアをおこなうことが、実践の大きな部分を占めている。そのためには、看護の対象である人に触れること（タッチ；touch）は欠かせず、それなしには看護というものは成立しないといえよう。しかし、看護する者がそれを、「看護」という語に含まれる人間的なかわりの一環としてとらえ、実施しているかということ、また、相互の交流の中で、タッチがどのような意味を持っているのかということについては、部分的な研究が開始されたばかりである。実践の学であることを目指し標榜する看護学において、看護者の手のなす仕事や人に触れる行為としてのタッチに注目し、看護の対象と看護者における、身体性を伴った相互性を考察することは、重要なテーマである。

本論では、看護としてのタッチが成立していると考えられるケアリングの関係（ケアし、ケアされる関係）のなかに、生涯教育として成立する契機を探りたい。それをふまえ、人と人との関係において人間の生涯にわたる発達とのかかわりの中で、タッチやタッチを学ぶことの意義について考察し、生涯教育的観点からタッチに関する実践的な教育のあり方を考える基盤としたい。

まず、第1項で人間の生涯への看護職者としてのかかわりとその根拠について、看護の理論、看護の職業的な役割から概説し、第2項で、看護職者に依らない、市井でおこなわれている看護を、広義の看護として位置づける。第3項では、生涯教育という概念の中で看護はどのように位置づけられるか

について、ユネスコにおいてはじめて「生涯教育」を提唱したラングランの著作¹⁾により検討する。第4項では、生涯教育の中に位置づけられた看護において、タッチを「不可欠な技」とし、人間形成の過程にタッチを織り込んで記述し、タッチを学ぶことの意義について考察する。

1. 人間の生涯への看護職者としてのかかわりとその根拠

人間の生涯について考える際、生老病死という言葉に依り、生涯をひとつのまとまりと見て大枠をとらえ、それをいくつかの視点で見る方法がとられやすい。本論でも、まず生涯を生老死の時間軸方向をみる観点と、病、つまり健康と疾病という観点をとりながら、人間が生活する空間という意味での地域をふまえて、それぞれの看護における捉え方、かかわり方を概説する。順序としては、看護が病にかかわる仕事であるという認識がかなり普遍的にされているため、まず健康という視点から、次に生老死という生涯の視点から論じたい。

1) 健康の様々な状態から

看護職者は、19世紀における近代看護の創始者とされるナイチンゲール(Nightingale, F.)以来、「看護とはなにか」という看護の本質に繋がる問いを常に問い続けながら実践してきた²⁾。薄井は、ナイチンゲール研究の中で、看護の本質はすでにナイチンゲールによって見出されていたと述べ、それは「患者の生命力の消耗を最小にするよう、すべてをととのえること」³⁾であるとしている。ナイチンゲールは、本来の看護(nursing proper)と健康を守る看護(health nursing)の両方を看護の範疇に含めた。住居の健康を守り、健康的な家庭を築くことにも心を砕き、健康に関する基本的事実についての教育の必要性を考えるようになった⁴⁾。その上で自然的な環境が健康に及ぼす影響を重視し、住居を守るために①清浄な空気、②清浄な水、③適切な排水、④清潔、⑤陽光のすべてを整えること、の5点を主要な強調点とし、さらに暖かさ、静かさ、食事に気を配るべきと考えていた⁵⁾。ドウグラーフ(deGraaf, K. R.)らの述べるとおり、ナイチンゲールが健康教育と病人の看護の両方を看護の範疇に含めたことは今なお看護実践を定義づけるものであ

り⁶⁾、その後の看護実践及び看護学の道程を指し示す道しるべとなっている。

1960年代初期に看護の定義を発表したヘンダーソン (Henderson, V.) は、「看護のユニークな機能は、人が病気であるか健康であるかに関わらず」「自分の健康増進や病気からの回復（または、安らかな死）をはかろうとしている個人を援助すること」であり、「援助はできるだけ早く個人が自己の自立を得られる方法でなされるべき」⁷⁾とした。また、看護ケアの構成要素のもとになる患者の14の基本的ニーズを明示した⁸⁾。これは、(1)正常に呼吸する、からはじまり、(10)他者とのコミュニケーションをもち、情動、ニーズ、恐怖、意見などを表出する、(12)達成感のある仕事をする、(13)遊ぶ、あるいは種々のレクリエーションに参加する、(14)正常な成長発達および健康へとつながるような学習をし、発見をし、好奇心を満たし、また利用可能な保健設備などを活用する、に至る、およそ人が健康に生活する上で欠くことのできないニーズを網羅した。

現代の看護に大きな影響を与えているロジャース (Rogers, M. E.) は、人間を「独自の機能を有し、部分の総和以上の、その総和とは異なる特性を示す統一体である」とし、人間の間をユニタリ・ヒューマン・ビーイング (Unitary Human Beings) と呼んだ。そして環境の間も人間の間もエネルギーの間であり、エネルギーの間は無限に広がる開放系であるととらえた。このことは看護診断という、医学的な診断とは異なる看護独自の診断治療体系の導入につながり、看護ケアの技法においても、従来の技法を超える新たな領域を開拓し⁹⁾、導入する理論的基盤を築いた。ロジャースは、看護とは「健康の維持と増進、疾病の予防、病人や障害者の世話と社会復帰のために同情的関心を寄せる人間科学である」とした¹⁰⁾。

このように看護職者は、近代看護の創成から現在に至るまで、その歴史的な状況は異なっても、病人の看護と健康への援助の両方に携わろうとしてきた。人間は、その生涯の中で、健康の様々な状態を体験するが、看護とは、その時々状況に余すところなくかわりうる理論上の根拠を持っているといえよう。

しかし一般に、看護とは病人の世話のように受けとられているところがある。これはおそらく、看護職者のイメージが、「白衣の天使」像として、病人の世話をする医療施設内看護師として定着しているからであろう。たしか

に、医療施設内の看護師は、看護職者の中でも最も人数が多いのである。しかし看護職とは、保健師助産師看護師法¹¹⁾にあるように、保健師、助産師、看護師、准看護師であるので、法的にも看護職者は地域保健や妊娠・出産にまつわる場に括がっており、さらに養護教諭として学校保健に携わる者もある。病人の看護と健康への援助の両者への志向、言いかえれば、健康という見方から人間の「生涯」にかかわり、人がより健康な人生を送ることができるよう援助することは、理論上だけでなく、現実的な根拠をも持っているといえよう。実際に看護職者は、人々が生活する様々な場——入院・通院施設である病院のほか、(助)産院、保健所や保健センター、産業、学校、訪問看護ステーション、保育所や幼稚園、老人ホームなど——を職場としているのである。

さらにまた、1986年に世界保健機構 (World Health Organization, WHO) において公衆衛生戦略として提唱されたヘルスプロモーション (Health Promotion) においても、看護職者の果たす役割が期待される。ヘルスプロモーションはキックブッシュ (Kickbush, I.) を中心に構想されたもので、「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義され、その究極目標は「すべての人々があらゆる生活舞台——労働・学習・余暇・そして愛の場——で健康を享受することのできる公正な社会の創造」¹²⁾である。ヘルスプロモーターの一員としての看護職者は、「あらゆる」生活舞台で人々が健康を享受できる公正な社会創造の一端を担う責任を持つことになるのである。

ナイチンゲールが19世紀の戦争と感染症の流行の中で考えた看護がととのえる「すべて」とは、やや物的な環境の整備に偏りがあったと言われるが、そのような時代性に規定されながらも「すべて」と言ったそれは、言い換えると生活そのものである。それが、国際レベルでの保健活動が計画・実行されるようになった現代において、生活舞台に含まれている「労働、学習、余暇、そして愛の場」におけるヘルスプロモーションにかかわるものに発展してきたと考えることができよう。このように、看護職者のはたらきは、地球上のあらゆる場所、あらゆる生活を射程に入れているし、「あらゆる生活」の場がすでに大気圏の外へ括がり始めた現在、すでにロジャースが述べていることであるが¹³⁾、宇宙における生活の健康への支援も、看護の場として括

がってきていると考えられる。

2)「生涯」の観点から

次に、健康の様々な状態を体験する生涯、という見方に加え、人生を生まれてから死ぬまでの時系列で捉える、文字どおり「生涯」を見る視点から考えてみよう。看護職者は、この生涯の内、どこを支援することを担っているのだろうか。

結論的に言えば、看護は、人生のある時期のみでなく、胎児期からこの世に生をうけるまでの介添人としてかかわるところから始まり、安らかな死へまでの生涯を援助の対象とするところに元々から持っている特性がある。

WHOは、人間の生涯を、受精から死、と捉えており¹⁴⁾、看護学のテキストのひとつではこれをよりどころに看護の対象について展開されている¹⁵⁾。そのため、健康の項で呈示した看護職者の職場を、これを意識しながら成長発達過程に並べ替えてみよう。これを元に見てみると、(助)産院、保育所や幼稚園、学校、産業、老人ホームは、受精から死をほぼ網羅して含んでいる。これらはおおよそ、生老死に関して人々が通常の生活を送る場である。これらの施設では、看護職者は日常的な病気やけがなどに適切に対応できるように配置されているのに加え、疾病予防や、疾病や障害を持ちながらいかに社会生活を送るか、あるいは健康増進といった観点から、それぞれの集団に属する個々の人々の健康の状態に目を配っている。さらに、入院・通院施設である病院、診療所に加え、近年は訪問看護ステーションによる在宅ケアが整備されてきた。それらと連動して、保健所や保健センターなどでは従来以上に諸施設とのネットワークを張り巡らせている。医療の場においても、看護職者は、胎内から死までの生涯をあらゆる段階にある人々を迎え、包括し、人々の健やかな成長発達を助け、健康を維持増進し、病を癒し、やすらかな死を迎えられるよう働いているといえよう。そしてもう1点看護職者のはたらきの重要な特徴は、1日24時間のどの時刻も、はたらかない時はないということである。

そのようなはたらきは、国内に止まらず、世界各地に広がっている。各国が独自に看護職者の育成をおこなっていることに止まらず、1899年に設立され、2002年2月現在124カ国(地域)の加盟協会による国際看護師協会(ICN；

International Council of Nurses) は、「あらゆるヘルスケアの場および地域社会において、健康の増進、疾病の予防、および身体的精神的に健康でない、あるいは障害のある、あらゆる年齢の人々のためにケアを包含する」¹⁶⁾と看護の定義に謳っている。

2. 広義の看護—看護職者に依らない、市井での看護について

こうして健康と疾病、あるいは生涯の観点から、地域・国際・宇宙的な拡がりを眺望すると、看護職者は、たしかに様々な場に拡がってあますところなくその役割を果たしているように見える。しかしながら、看護職者の働かない時間・空間というものはないのだろうか。

そのような目で実状を見ると、看護職者が網目を張り巡らしているその目は、まだまだ粗いし、偏りがあるということに容易に思いつくだらう。では、看護なしに、人々は生活してきたのだろうか。

言うまでもないことだが、看護というのはたらきそのものは、看護職者の存在しない場所においても、また近代看護が開始する以前から、営々と営まれてきた、人と人との交わりに必要不可欠なはたらきと考えられる。ナイチンゲールが、看護が健康に対して責任を負うためには、すべての女性はいつかは看護婦であると考えていた¹⁷⁾ように、それは家庭の中、職場や学校、地域において、趣味の場においてであり、あらゆる人間関係の中で、互いを助け、互いに健康を守り増進するはたらきとして必要とされている。

実際、看護は看護職者のおこなう看護以前に、人間の生活するいたるところで、すべての人間によって自然に、また意図的におこなわれている。家庭においては家庭の、地域においては地域の、仕事の場においては仕事に関する看護の働きがある。家庭においては両親の看護により子どもがより健康に成長発達し、老年期にある人が介護をうけ、病気を予防しあい、いざ病気になったときには早く回復するよう手当をうける。親は子どもの無邪気さに疲れを癒され、活力を得る。道ばたでは近所の人が互いに挨拶しあい、なにか困ったことがあったら慰めあい、助け合う。友人や仲間と共に学び、遊び、競いあい、慰め合いながら共に成長する。看護はこのような生活での様々な関わりの中に、生まれては消え、かたちを変えながら引き継がれてきており、

これからも伝えられるはずのものである。

その看護とは、アメリカの文化人類学者ミード（Mead, M.）が1956年に米国看護協会で講演した中で述べた「思いやり、いたわり（compassion, compassionate）¹⁸⁾にあたるものであり、それを具体化する行為であると考えられる。看護職者のおこなう看護は、それら市井で不断に行われつづけている看護なしには成立しない。人間社会を存続・発展させてきた力の重要なひとつはこの「思いやり、いたわり」にあり、それはすべての人間が持ち、発展・継承してきた人間の重要な特性といえよう。この「看護＝思いやり、いたわり」の働きは、①人間の住むあらゆる場所で、②すべての人間を生涯その対象として、③人間が、健康、疾病の状態いかに関わらず、不断に営まれ、人類がより快適で健康な生・老・病・死を体験することができるよう互いを援助しあっているのである。

3. 生涯教育と看護とのかかわり

看護の理論や実際の活動の場を、看護職者および市井で不断におこなわれている看護について概観してきた。看護とは、①人間の住むあらゆる場所で、②すべての人間を生涯その対象として、③人間が、健康、疾病の状態に関わらず、不断に生活において営まれる働きであるとした。また、看護職者のする看護は、市井で、あらゆる人々がする看護のはたらき、「思いやり、いたわり」を内包した人と人との不断の関わりを前提して成り立っていることを確認してきた。それらの看護のはたらきをどちらも包含する広義の看護において、上記3点から、「人間」「生涯」がその主要な概念として抽出でき、さらに「住むあらゆる場所」「健康・疾病の状態にかかわらず」については、「生活」に包含されるものと考えられる。そこで、以上を「人間」の「生涯」にわたる「生活」への「思いやり・いたわり」を内包したかかわりが、看護のはたらきである、とまとめ、この項では、これをふまえて生涯教育と看護とがどのように関わっているのかについて考察する。

1965年、ユネスコ（UNESCO）の第15回総会（1965）においてはじめて「生涯教育」を提唱したP. ラングラン（Lungrand, P.）により著された「生涯教育入門 第二部（1975、邦訳1979）」¹⁹⁾に従って見てみよう。この本は、訳者

波多野による序文によると、1970年版の増補版であり、第二部の諸章は増補部分であると示されているものであり、初版後の様々な疑問や批判に触発されて書いたものとみられている。そこでは「あるがままの人間」を真の教育の対象とし²⁰⁾、教育とは「あらゆる種類の経験においてその諸能力を駆使し、人間の発達を図ること」と定義されている。この定義を、看護を文脈の中に読み込んでいく最初の手がかりとする。「あらゆる種類の経験」とは、生・老・病・死という生涯にかかわる生活上のあらゆる経験であると考えられる。

では、諸能力とは何にあたるのか。ここでは、思いやり、いたわりという「能力」をその諸能力のひとつであるとして考えよう。能力とは、三省堂大辞林（電子辞書）によれば、物事を成し遂げることのできる力²¹⁾であり、そこには持って生まれた力と、環境や教育によって発達する、技量の面とが関与しているものと考えられる。思いやり、いたわりは、人間が本来有している属性ではあるが、それをどこでどのように発揮するか（または発揮しないか）、という観点から社会や個々人を眺めると、そこには人や状況、場面などの相違により、様々な状況が描かれる。また「思いやりのある子に育てる」ということは、ひとつの教育の重要な目標でもある。そのため、「思いやり、いたわり」とは、「諸能力」のひとつとして開発、熟練されるものであると考えられる。その能力を向上させながら駆使して人々を具体的個別的生活のなかで援助し、よりよいものとして経験できるように配慮するはたらきが看護であるといえよう。そのようなはたらきとしての看護は、ラングランの構想した生涯教育の内側に入り込み、人間の発達を促す原動力、即ち生涯教育を推進する力のひとつと位置づけることができよう。

ラングランはさらに、この「あらゆる種類の経験においてその諸能力を駆使し、人間の発達を図ること」という定義は、おそらく不完全であるが、そこに含まれている諸要素の複雑性からみて、完全に定義することに疑問を呈示しながら²²⁾、この定義を「人間」「発達」の2つのアクセントにおいて説明しようと試みている。「人間」では、真の教育過程は「人間の要求、その希望、事物と人間の世間との間に人が維持している生きた関係に全力を注ぐ」²³⁾ものとなされ、その人間が生涯にわたって存在するものであるところに、「発達」が意義づけられる。看護は、その「人間」の「発達」に深く根ざすものである。よりよく成長しようとする子どもとその家族を支え、うるおいのある人

生とすること、健康や病気に関する要求や希望を共に探し、応えることをはじめ、個々の人間の成長発達過程に寄り添いながらおこなわれる看護は、「生涯教育」における「真の教育過程」にかかわると考えられる。

以上を要約すると、生涯教育の観点から看護を考える際、「あるがままの人間」という真の教育対象は、看護の対象そのものである。また看護のエッセンスである「思いやり、いたわり」は、生老病死という生涯にかかわる「あらゆる種類の生活上の経験」において駆使される「諸能力」のひとつであり、「人間」の「発達」に深くかかわるものである。看護とは、生老病死に関する人間の要求、希望、事物と人間の世間との間に人が維持している生きた関係に、健康の観点から全力をそそぐものという意味において、「真の教育過程」であるといえよう。

4. 生涯教育としての看護の観点からのタッチについて

1) 生涯教育としての看護に不可欠な技

では、本論冒頭において、筆者が看護に必要不可欠としたタッチとは、生涯教育においてどのようなものと考えられるだろう。

タッチ (touch) にはいくつかの意味があり、その中には「harm; 害する」「disturb; かき乱す」なども含まれ²⁴⁾、必ずしも肯定的な意味合いだけに使用されない。また良かれと思ったタッチが、相手にとって不愉快なタッチ、不安になるタッチであることなど望まない結果を招くこともあれば、なにげないタッチに感動が走ることもある。ここではまず、看護としてのタッチとはどのようなものか、「ケア」の意味を探りつつ明らかにすることを試みようと思う。その上で、生涯教育の「真の教育過程」にかかわる「人間」の「発達」にとって、タッチとはどのような事であるのかを考えたい。

ここまで、ミードの述べた「思いやり、いたわり」に依って進めてきたが、このことは、ケア (care) についての理論的探究に結びつく。メイヤーロフ (Mayeroff, M.) は「ケアの本質」のなかで、ケアとは、相手を思いやり、成長をたすける行為とし、最も深い意味で、その人が成長し、自己実現することを助けることを、「一人の人格をケアする」こととした²⁵⁾。看護においてケアリング理論を展開しているワトソン (Watson, J.) は、看護の際のヒュー

マンケアという価値観に関連した前提を11点挙げている。そのなかでケアは看護の本質（essence）であり、実践の扇の要の位置にある²⁶⁾と述べている。また、看護は人に対するときは常にヒューマンケアのスタンスをとってきているが、看護婦および看護ケアについての価値観はこれまで陰に隠されてきたため、看護の現場におけるこのようなケアの維持が重大な局面に立たされている²⁷⁾、と警鐘を鳴らす。

ではケアすることとしないことの間に、どのような差がみられるのだろうか。ワトソンは、ケアする人の態度の特徴を対比させている。

ケアする人 —— 相手をこの世にひとりしかいない独自の存在として
対応する

ケアしない人 —— 相手をかけがえのない存在として対応しない²⁸⁾

そして、ヒューマンケアは、相手とひとつになるありようが含まれているトランスパーソナルなケア、という関係と密接にかかわっているため、看護の道徳的次元での理想であるとする。その際のケアの技（アート；art）の営みとは、人に交わることにより得られたフィーリングを自分の中に呼び起こしながら、動作、タッチ（手などの触れ合い）、音、言葉、色、形あるものを使って、そのフィーリング（感情）を伝え、もう一人（患者）も同じフィーリングを体験することにある²⁹⁾。このようにワトソンにおいて、タッチは、動作や音、言葉、色、形あるものといったものと同様に、看護におけるヒューマンケアの技として置かれているものである。

ラングランは「人間の肉体は数世紀間、教育過程で第一に忘れられるものであったし、現在も変わらない。」³⁰⁾ことを指摘し、「身体を知悉するためにそれを知ること、その表現・コミュニケーションの力を駆使すること、その行き過ぎを抑圧すること」³¹⁾、即ち知的・情緒的な面とのバランスをとることに言及する。生涯教育において、肉体の表現・コミュニケーション能力を教育し、発展させることも重要なポイントとされているのである。

この肉体のコミュニケーション能力には様々なものが考えられる。例えば存在そのもの、ボディランゲージ、さらに街頭でのパフォーマンスや舞台での表現芸術、スポーツにいたるまで幅広く想定できる。その中でタッチは直

接的に相手の皮膚感覚を刺激するコミュニケーション方法として含まれる重要なひとつであろう。タッチはここにおいて、生涯教育としての教育において対象とされる能力であり、発展させてゆく必要があるものだととらえることができる。ではどのような方向に発展させてゆくことが人間の発達のためにふさわしいのだろうか。

看護学においては、操は「皮膚感覚をも含めたすべての感覚を用いて、患者と触れあっていく現象」³²⁾が看護であるとし、人が人に触れる「タッチ」は、患者－看護者関係において「両者間の感情を伝えるもの」「患者の思い、心にタッチすることになる」とする。さらにタッチを患者－看護者間に限定せず、看護の発祥を人類の誕生と同時に位置づけ、母が子に、また人が見知らぬ旅人に手をさしのべる態度に例え、「看護」と「タッチ」を人に普遍的な行為として位置づけ直す³³⁾。前出の文化人類学者ミードも、「思いやり、いたわり」の看護のイメージ像として、「苦しんでいる人、おびえている人、悲しみにうちひしがれている人の肩にやさしく手をおいている人の姿」をいつも思い浮かべると述べている。そして看護を、あたたかい洞察力のある人間欲求の理解が両手の働きとなりあらわれる、手と心と頭の一体化した仕事であるとし³⁴⁾、タッチが看護の象徴的イメージとして、またその具体的実践として切り離せない結びつきを持っていることを語っている。

このようにタッチは、肉体に接触するというのみに留まらず、その行為は思いや心へのいたわりであり、苦しみやおびえを癒すものとして描かれる。ここに介在する肉体と心についての見方は、ベッツ (Betz, O.) の「人間とは身体を与えられた魂であり、魂を吹き込まれた身体である」³⁵⁾という見方である。この見方を持つてすれば、タッチとは、身体に触れることを通じてその魂に触れることにつながり、それ故に看護を象徴的にイメージする際に、その弱い、見知らぬ、苦しむ人々へさしのべ、抱く手として表現されることが了解できる。

WHOでは1999年世界保健総会より健康に関する定義の改訂を検討しており、その要点は「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態」から「完全な肉体的、精神的、スピリチュアル (spiritual) 及び社会的福祉の動的状態」³⁶⁾への変更である (下線筆者)。スピリチュアルの邦訳は、「霊的」「実存的」「全人的」「心の」あるいは「魂の」などが検討されるが、現行ではそのまま「ス

ピリチュアル」とされることも多い。この成り行きがどうなるかは定かではないが、21世紀を目前とした時点で、人間のスピリチュアリティがその肉体的・精神的・社会性と共に健康の定義として論議されはじめたことも意義深い。ラングランが重要な生涯教育の課題とした肉体の表現・コミュニケーション能力を教育し、発展させることは、ヒューマンケアにおいて動作やタッチの技として、肉体に触れつつ同時にその魂、霊性、存在そのものに触れ、そのフィーリングを伝え、相手をかけがえのない唯一無二の、その時にその場でしか存在しない大切なもの（人）として対応するために使われるのである。生涯教育において重視される「人間」「発達」の中にケアの本質が欠けるとしたら、そこには真の教育過程としての「人間の要求、その希望、事物と人間の世間との間に人が維持している生きた関係」³⁷⁾はありえなくなる。人間がその個性を失い、かけがえのないユニークなひとりとして尊重され、自らそれを自覚しないところでは、「生きた関係性」も「発達」も育つことが困難である。タッチとは、直接皮膚感覚をとおしてその人の心、魂に触れるという意味で直接的な影響を与えうため、相互に生涯教育を促進することにおいて重要かつ不可欠な「技」だと考えられる。

2) タッチからみた人間形成過程

タッチを、人と人との関係において用いられ、生涯教育における人間の発達にかかわり、教育の必要のある技であると考えてきた。ここでは、人間の発達の中で、タッチがどのように介在しているのかについて鳥瞰を試みる。タッチは、単独で用いられることもあるが、前項で見たように、他の技と共に複合的に用いられることが多い。また看護学においても中西（1978）³⁸⁾が指摘したように、複合的に用いられた場合、話されている内容や傾聴・共感が主に分析対象となり、タッチは焦点化されにくいものであった。そのため、我が国においてタッチが研究され始めたのは、70年代から80年代にかけてである。90年代後半に入って研究の数は増え、乳幼児期をはじめとして様々な年代を対象としている様子であるが、まだ数が少なく、医学・歯学・看護学など医療系の雑誌に掲載されたものを集積した文献検索システムである医学中央雑誌のCD-ROM版（2000年10月検索）では、1994年度から2000年度にかけて、原著論文、解説、会議録などあわせて71件であった。こ

れについては、稿をあらためて研究の現況を概説する予定であるが、本稿では、生涯のどの時期にもタッチが関連していることを追ってみる。

nurseから派生したnursing（看護）は元々、語意の面から、乳母や保母を指す。乳幼児を健やかに育てるその人は、看護者なのである。動詞では、「看護する」のほかに「乳をやる」「大事に育てる」「細心の注意を払う」「注意して大事に扱う」を意味するように³⁹⁾、乳幼児が健やかに育つための保育と深く関連しており、乳幼児期の健康な成長発達と看護の関わりは深い。アタッチメント（attachment, 愛着）理論を提案したイギリスの精神分析学者ボウルビー（Bowlby, J.）は、誕生時の乳児は決して白紙の状態でなく、泣き叫び、吸引、しがみつき、定位をつかさどる原始的システムがすでに存在しているという⁴⁰⁾。アタッチメントは、ある特定の人物が他の特定の人物との間に形成する愛情のきずな（attachment tie）を指し⁴¹⁾、年齢を問わないが、乳幼児期の母子関係を中心として展開されている。

それによると、新生児は全くの受動的存在ではない。持てる能力を駆使して積極的に周囲と関わろうとする能動的存在である。乳幼児の行動に母（あるいはそれに替わる人）が応じるタイミングが、アタッチメント形成に重要であるとされ、子どもが安全感を持つことがその重要な機能であり、母親を「安全基地」として信頼した子どもはそれをよりどころに外界への探索を開始し、自分への信頼を持ち、自立への道程に至る。アタッチメントの発達に自立の過程が含まれていることが重要であり、他者との信頼関係形成もこれが基礎となる⁴²⁾。近年アタッチメント理論により母子相互作用の重要性が認知されたこと、さらに出産後の母児接触がホルモンの分泌を促進し、母子の絆が形成されるとしたクラウスとケネル（Kraus, M. H. & Kennel, J. H.）らの研究⁴³⁾などにより、家族と離れて入院し、保育器で育っている未熟児を一定時間胸に抱き、肌を合わせて抱っこするカンガルーケア⁴⁴⁾や、乳児へのゆっくりとしたマッサージと四肢運動を組み合わせたタッチケア⁴⁵⁾が推進されつつある。

また、母親（や周囲の人）の子どもへのアタッチメント（マターナル・アタッチメント；maternal attachment）は、子どもが愛着関係を健全に形成できるための大きな要因として共に重要視されている⁴⁶⁾。子どもが助けを求めるサインを出したとき、適切にそれに応える能力の形成である。マターナル・

アタッチメント形成のためにも、子どもとのタッチや抱っこが重要な要素となる。母親またはそれにかわる存在、さらに保母や乳母としてのnurseが、母子相互作用において子どものアタッチメントの発達を促進し、子どもが自分への信頼を形成して自立への道程を歩むパートナーとして自らも成長発達していく過程には、タッチを介したかかわりが不可欠なのである。

生まれたての子どもは、中枢神経と同じく外胚葉に由来し、莫大な感覚受容器が分布する皮膚⁴⁷⁾からの触覚（タッチ）をはじめ、声、眼、匂い、味、といった五感への様々な刺激とそれらの持つ意味をとらえ、それぞれの快－不快、安心－不安、満足－不足の繰り返しが独自の成長発達過程を形成する。原始システムのひとつとして「しがみつきの能力を持って生まれた子どもは、それを元に様々なタッチの技法を学びつつアタッチメントを形成する。安心の時は母親にからだを完全に預け、腕の中で眠る。頬をぴったりとくっつけるようにして甘える。「安全基地」としての母親（相当する人）を確保しながら同時に様々なものに興味を示し、手、口で確かめ、遊ぶ。眼で見た遠くのをさわりたいくて這ったり伝い歩き、歩くことを覚え、全身で喜ぶ。声をだし、涎を思いつきり流しながら表現する。タッチはそれだけで存在するのでなく、様々な感覚を総合しつつ用いられ、体験される。

時に、痛みも覚える。ぶつかったり転げ落ちたり、ぶたれることもある。子どもも力の加減が出来ない最初は思い切りものを叩いたり、大人を叩いたり、子供同士で叩き合う。ほしいものがあると取り合う。相手から様々な反応が返る。叱責をうけたり泣かれたり、叩きかえされたり、ことばでさとされたり、やさしく抱きしめられる。タッチを通して痛みを知り、悲しさや怒り、我慢をおぼえ、気持ちのよいタッチとの比較でどちらを自分が好むかを体験的に選択し、それらを通して他の子どもたちや大人との接し方、物的環境とのかかわり方を学ぶのである。

乳幼児期だけでなく、成長発達の過程で、おそらくタッチは重要な意義を持っている。成長するにつれて、友人や仲間が増え、変化し、つきあいかたも変わる。遊びの中でも触れることは大いに活用される。手を繋いだり肩を組んだり、くっつきあって戯れること、こぶしをにぎってたたかうこと、あるいは一切触れることなく遠ざかることも学ぶ。「ゲームばかりしていて触れあわないで無言で遊ぶ」とか「最近の子は子どもの頃適度なじゃれあいや

けんかをしないから、いざけんかをする、程度がわからない」といったことが問題となる。青年期では、互いにとって触れることは性的な意味も含め、特別な意味を持つ。たくさんのインスピレーションを得、互いのかげがえのなさ、大切さを学び、また身体が触れ合っている心・魂が触れあわないことからの孤独をも学ぶ。また他の多くの人々とのタッチや、タッチまでの過程、距離感から様々なことを学ぶだろう。友人ら、仲間、異性、夫や妻、子ども、子どもの友人、老人となった親、仕事の関係者、たまたま出会う人たち、社会奉仕活動で出会う人たち、様々な人と出会い、関わり合う中にも、様々なタッチが介在しながら関係が形成されていく。

老年期は、子どもが独立し、つれあいとの関係を新たに見直す時期でもある。文字通り共に手を携えて生きる夫婦もいれば、たとえば定年離婚に踏み切る夫婦もいる。また孫を抱き、おんぶし、手を繋いで歩くことが大いなる喜びだと気づくこともある。自分も老いる中で親の介護に苦労したり、自分が介護されるなど、生きていく上で人の手が再び必要となる時期でもある。確立してきた「自分のことは自分で」していた領域に、看護や介護などの目的によって他者の手が入り、その領域を明け渡さざるを得なくなる状況もあるだろう。また、全くの孤独の中で、他者と文字どおり触れあうことのない生活をおくる人もいるのである。

臨死期は、別れ、旅立ち、あいさつ、約束の時期である。魂が不死であろうとなかろうと、その肉体でのその人は死後再び生まれ出ることはない。生命を尊び讃える最期である。そして、肉体に触れることのできる最期でもあるのである。親しい人やケアにあたった人との触れ合いは、文字どおり「今、ここ」を共に生きた証のように、持てるすべてを互いに交流するようなものとなる。

看護職者においてタッチは、上述した内容との重なりあうところを含めながら、看護が具体的生活過程において人を支え、援助する働きを持つため、まず日々の生活に密着しておこなわれる。例えば、タッチは、子どもが転んでけがをし、泣きながら駆けてくるのを抱きとめるからだ、歩くことに不自由な人を支える腕、入浴出来ない人のからだを拭き、マッサージする手を通しておこなわれる。また、便器にしゃがむのを助け、代わりにお尻を拭く手を通して、「どうしたの」と肩に添える手、「よかったね」と握る手を通して

おこなわれる。死にゆく人と最期に交わす握手や抱擁も、看護職者のタッチである。そのような、日常にあるタッチが、「思いやり、いたわり」としておこなわれるとき、それが看護におけるタッチの一粒ずつの粒子となる。

さらに、看護職者は、様々な医学的治療のおこなわれる場にも入り込み、検査や治療の滞りなく苦痛の少ない進行を援助するために、また怖れを軽減するためにもタッチを用いる。このような困難な場面も、当事者においては生活の一部（ただし、非日常的な）である。しかし最も人の助けが欲しいこのような場面において、その人は一人取り残され、苦痛に耐えることへの挑戦を強いられることがある。人間は、どのような場にも肉体だけを切り離しておくことはない。常に同時に心・魂を携え、全体性をもって存在する。肉体とともに縮こまっている心、魂に触れ、「大丈夫」と知らせる「思いやり、いたわり」は、看護の重要な働きであり、看護職者の生活密着性は、日常性ととともに、身心の苦痛を伴う検査や手術などにかかわる非日常的で困難な生活場面にも発揮されるという点で重視すべきである。

3) ケアとしてのタッチを学ぶ意義

生涯のどの時期においても、広い意味で接触すること（タッチ）は、様々な意味を持つ。皮膚からの強い刺激は痛みとなって脳に伝わり、苦痛や緊張を呼び起こし、それを与えた対象や意味への否定的感情の学びを触発する。強いタッチは、「しつけ」として親から子へ、教師から園児・児童・生徒らに向けられることがある。また、主に男性から女性への（性的な）暴力としてあらわれるタッチもある。すべての段階において、「体罰」や「虐待」については、「真の教育過程」において、「タッチ」をどのように用いること（あるいは用いずに他の方法をとること）が、互いの成長発達を促すのかといった観点から検討することができよう。歴史の中の人間は、未だ「真の教育過程」としての生涯教育というものがあることを知ったばかりであり、それを歩き始めたところである。この過程は、これからの人間社会形成にとって重要であるが、人間はまだ自分の内なる力を十分に発揮し、コントロールする術を身につける自己教育をこれからおこなっていかなければならない。

ケアとしてのタッチの学びは、相手を尊重するタッチであるが故に、相手がいまどのような状態か、どのようなタッチが必要か、また不必要かに同時

に目を向ける。ただやさしいタッチをやみくもにすることに意味を求めるのではない。高崎⁴⁸⁾は、看護職者は具体的な援助技術をもつことが、患者の真に求めているものを覆い隠すことの危険を指摘している。相手のところに届くことばを選ぶこと、ただそばにいて普段通りに過ごすことが大切な場合もある。統合的にその状況から判断する中に、ケアとしてのタッチを工夫することが含まれる。

互いをかけがえのない存在として対応する、思いやり、いたわりの具体的表現としての（ケアとしての）タッチは、人が成長発達する過程において学ぶべき重要なものである。相手に安心や満足、安楽を伝えるタッチは、互いがケアするものとして成長することを方向付ける。看護職者自らのタッチを用いた援助を構築することと共に、人間の真の教育過程としての生涯教育において、人々がどのようなタッチを体験して成長し、どのようなタッチを学習することが望まれるのかを考え、見出し、そのことによって人々の学びを支援することも、同時にまた看護における重要な課題のひとつである。

おわりに

看護について、看護職者のおこなう看護と、市井で不断におこなわれている看護とを関連づけ、ミードの「思いやり、いたわり」を手がかりとしながら、生涯教育を「真の教育過程」とするラングランのいう「人間」「発達」の中に織り込み、思いやり、いたわりの具現としてのタッチを、生涯教育の過程で人間が相互に成長しあう過程で必要不可欠なはたらき、学ぶ意義のあるものとして考察した。

看護学者で、ヒーリング（癒し）タッチのひとつであるセラピューティックタッチ（TT；Therapeutic Touch）の開発・研究・教育・実践者であるクリーガー（Kriger, D.）は、看護専門職者以外へのTTの教育も惜しまない。またヒーリー（癒される人）はその体験を通しヒーラー（癒し人）となると述べている⁴⁹⁾。TTは、エネルギー体へのタッチという、気功に似たタッチの特殊な一形態であるが、ここで展開した通常のタッチでも、同様のこと－ヒーリーから体験をとおしてヒーラーとなる過程－に注目する必要がある。タッチは感覚を通して、つまり体験をとおしてその有用性に気づくことが重要な鍵

である。味わってみてはじめておいしい、まずいがわかるのと同様の性質を持っている。

専門職者としてはもちろんだが、家庭や地域、学校、様々な場で、ケアとしてのタッチによって何かを得られた体験を持つ人は、自らそれを用いたり、少なくとも理解者となりうる。看護としての、「思いやり、いたわり」としてのタッチをおこなうための生涯教育は、そのようなタッチを中村の言う「刻印する経験」⁵⁰⁾として体験することによる学びを同視野にいれつつ考えなければならない。

謝 辞 本論は、佛教大学大学院教育学研究科生涯教育専攻の修士論文（2001年3月）の一部に加筆修正した。主査・田中圭治郎教授をはじめ、諸先生方にご指導をいただきましたことに深謝いたします。

【注】

- 1) ボール・ラングラン著、波多野完治訳、『生涯教育入門 第2部』、財団法人 全日本社会教育連合会、第3版、1989（平成元年）、東京、p.68.
- 2) 小島通代編著、『看護を一生の仕事とする人・したい人へ』、日本看護協会出版会、1998、p.97.
- 3) 薄井坦子、『科学的看護論 第3版』、日本看護協会出版会、1997、pp.22-23.
- 4) Tomey, A. M. 編著、都留伸子監訳、『看護理論家とその業績 第2版』、医学書院、1995、p.74.

この本の中で、ナイチンゲールの業績（p.71-85）を解説したドウグラーフ（deGraaf, K. R.）らによると、ナイチンゲールのいう本来の看護とは、病気になった者が再び元気になれるように、あるいは少なくとも、死までをよりよく生きることができるようにする看護を指す。

- 5) 同上、p.72-73.
- 6) 同上、p.75.
- 7) 前掲2)、p.98.
- 8) 同上、p.104.
- 9) 前掲4)、p.217.

ここでは、“エネルギーの場”理論を研究に応用した具体例として、セラピューティック・タッチ（Therapeutic Touch）が好例としてだされることについて述べている。

- 10) 前掲4)、p.214.
- 11) 『保健師助産師看護師法』
- 12) 島内憲夫訳、『21世紀の健康戦略2 ヘルスプロモーション—WHO：オタワ憲章—』、p.29, p.32、垣内出版株式会社、1990.
- 13) マーサ・ロジャース著、樋口康子ほか訳、『ロジャース看護論』、p.106、医学書院、1979.
ロジャースは、看護の目的を「できるだけ最高の健康を達成できるよう人々を援助すること」とし、「看護の活動舞台」を「家庭、学校、職場、遊び場所、病院、ナースিংホーム、外来診療所など地球上の至るところにあり、そして今や宇宙空間にまで広がっている」と述べている。
- 14) 波多野梗子ほか、『系統看護学講座、専門1 基礎看護学1 看護学概論』第13版、p.79、医学書院、2001.
- 15) 同上
- 16) <http://www.nurse.or.jp/kokusai/icn/nursingdfn.html>、『ICN』看護の定義、2002.10.25付。
- 17) 前掲書4)、pp.72-73。「すべての女性は」、という記述は、ナイチンゲールの時代の限界である。現在我が国では、看護職者の資格は助産師を除いて両性がとることができ、家庭での看護は男性の役割でもある。
- 18) 稲田八重子他訳、『看護学翻訳論文集1、新版・看護の本質』、M. ミード、『看護—原初の姿と現代の姿』、現代社、1996、p.9.
- 19) 前掲1) p.68.
- 20) 同上、p.5.
- 21) 三省堂『大辞林』第二版、goo国語辞典
http://dictionary.goo.ne.jp/cgi-bin/dict_search.cgi?MT=&sw=2.
- 22) 前掲1) p.68.
- 23) 同上.
- 24) 小川芳男編集顧問、『ウエブスター英英和辞典 日本語版』、日本ブリタニカ、1972. pp.976-977.
- 25) ミルトン・メイヤロフ著、田村真ほか訳、『ケアの本質 生きることの意味』、ゆみる出版、1987、東京、p.13.
- 26) ジーン・ワトソン著、稲岡文昭他訳、『ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア』、医学書院、1992、p.44.
- 27) 同上.
- 28) 同上、p.45.
- 29) 同上、pp.91-99
- 30) 前掲書1)、p.68.
- 31) 前掲書1)、p.70.

- 32) 川島みどり他編、看護技術研究会著、『別冊「ナースング・トウデイ」No.9 看護技術の科学と検証 日常ケアの根拠を明らかにする』、日本看護協会出版会、1996、p.89.
- 33) 同上、pp.89-90.
- 34) 前掲書18)、pp.9-10.
- 35) オットー・ベッツ著、西村正身訳、『象徴としての身体』、青土社、1996、p.35.
- 36) 津田重城、『WHO憲章における健康の定義改正の試み —「スピリチュアル」の側面について—』、ターミナルケア 10(2)、2000、pp.90-93.
- 37) 前掲書1)、p.68.
- 38) 中西睦子、『文献に探る 特集 看護における“手”』、看護、28(8)、1976、p.p.22-28.
中西は「いやす手」について看護文献を引用しつつ、タッチが研究テーマとされにくいことについて興味深い指摘をおこなっている。がん患者ケアで、下肢を切断した後、幻肢痛で不眠のあった患者へ健側肢マッサージをしながら訴えを聞いて入眠され、翌朝よく眠れたと喜ばれた事例、頭痛のある患者の話聞きながら痛みのある部位をなでていると、うとうとされた事例をとりあげ、どちらかという傾聴と共感により効果があったと分析されていると述べている。このことは、言語を用いた意味内容の理解を基盤とした看護ケア技法に比して、タッチは注目されにくいもの、効果が検討しにくいものであったと解釈できよう。
- 39) 小西友七ほか編集、『ジーニアス英和辞典 改訂版』、大修館書店、1994、p.1227.
- 40) ボウルビイ著、黒田実郎他訳、『母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 改訂版』、岩崎学術出版社、1991、東京.
- 41) 庄司順一他、『アタッチメントの形成と発達』、小児看護、17(11)、1994、pp.1467-1470.
- 42) 同上.
- 43) クラウスとケネル著、竹内徹ほか訳、『母と子のきずな』、医学書院、1979.
- 44) 堀内勤他、『カンガルーケア めくもりの子育て 小さな赤ちゃんと家族のスタート』、メディカ出版、1999、p.126.
- 45) 堀内勤、『タッチケアとカンガルーケアの相関』、チャイルドヘルス、2(6)、1999、pp.418-423.
- 46) 繁多進、『子どもへの愛着の発達』、小児看護、19(5)、1996、pp.540-545.
- 47) 前掲書44)、p.18.
- 48) 高崎絹子、『身体的リアリティとしての患者—看護者関係<2> 手の考察』、看護展望4(10)、pp.41-51、1979.
- 49) ドロレス・クリーガー、『セラピューティック・タッチのプロセスは、ヒーラーの内なる変化も促すのです。人にやさしい「母なる医療」を求めて』、CAMUNet、1999、pp.2-6.
- 50) 中村雄二郎、『臨床の知とは何か』、岩波新書、1992.